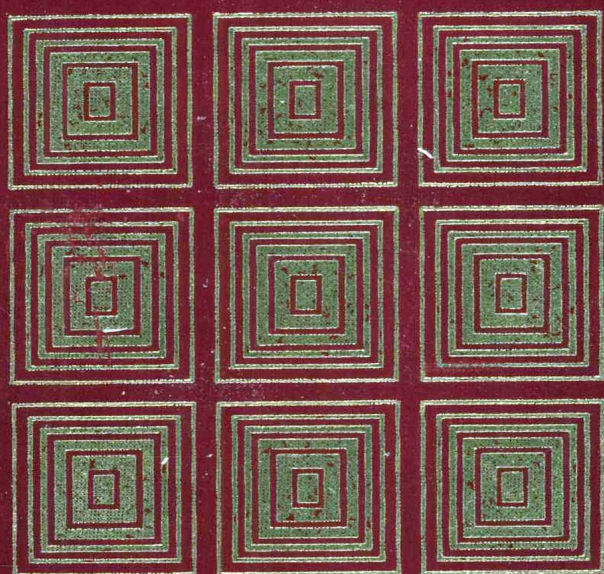
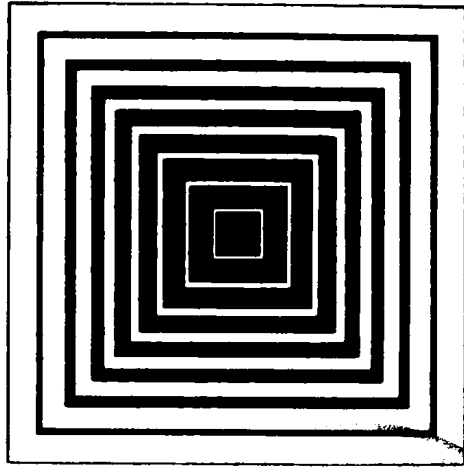




江戸小説集

II

金々先生栄華夢・通言総籬・風流志道軒伝・放屁論
放屁論後編・凄陰隠逸伝・東海道中膝栗毛・浮世床・春色梅暦



河出書房新社

日本の古典 25
江戸小説集
Ⅱ

昭和四十九年十月二十日 初版印刷
昭和四十九年十月三十日 初版発行

訳者 杉森久英 他

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

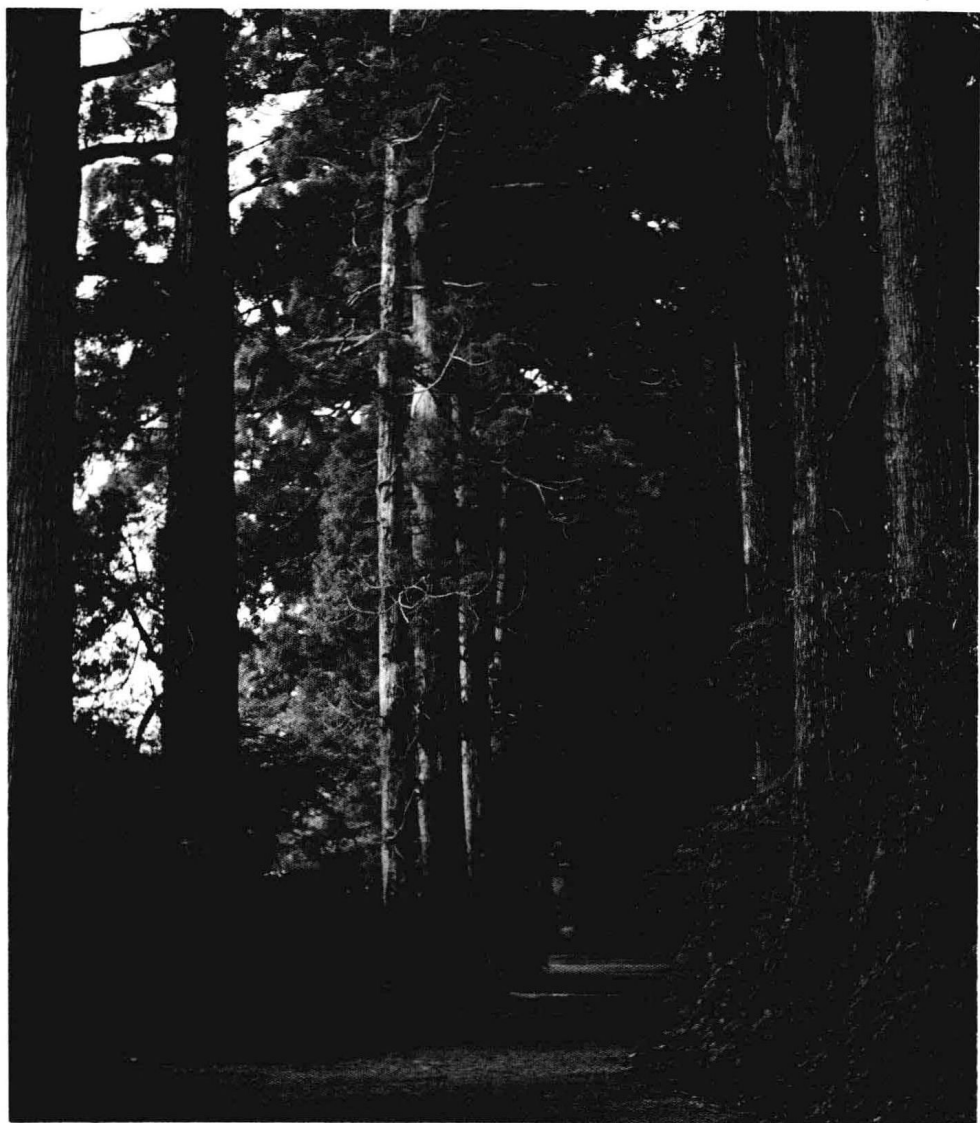
製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価は帯に表示してあります

©1974



箱根の杉並木

目次 江戸小説集Ⅱ

〈作品鑑賞のための古典〉

大田南畝

繪草紙 菊寿草
評判記

十文字 倉自忍

戯作評判花折紙

大田南畝
増訂一話一言

前田 愛訳 三七

恋川春町
金々先生栄華夢……杉森久英訳 一九

山東京伝
通言総籙……野坂昭如訳 二七

風来山人
風流志道軒伝

放屁論

……いいだ・もも訳 四九

放屁論後編

痿陰隠逸伝

十返舎一九

東海道中膝栗毛……伊馬春部訳 九五

式亭三馬
浮世床……久保田万太郎訳 二七

為永春水

春色梅暦……舟橋聖一訳 三二

寶庭蜜村
春色梅ごよみ

岩本活東子
戯作六家撰

長谷川金次郎
かくやいかの記

近世物之本江戸作者部類

薄沢馬琴

処士鳩溪墓碑銘

杉田玄白

解説

安岡章太郎 三

解題・年譜

渡辺憲司 四〇七

注釈

池田弥三郎 四二二

渡辺憲司

挿画 東海道中膝栗毛

横山泰三

風流志道軒伝
春色梅暦

村上 豊

解説写真

榊原和夫

解説

笑いと涙——いたましい協和

「膝栗毛」というと私は、自分が軍隊から復員したばかりの頃を思い出す。当時は他に娯楽もなかったし、活字に餓えていたこともあって、手当たり次第にいろんなものを読んだが、その中で最も印象ふかく共感をおぼえたのは十返舎一九の「道中膝栗毛」とセルヴァンテスの「ドン・キホーテ」であった。

おもえば戦争中の軍隊生活というのは、突拍子もなく長くてツライ旅に似ており、毎日の運命は道中双六さながらにサイコロの目次第というようなものだった。それで私は右に上げた二つの旅行小説を読みながら、一方で自分自身の兵隊時代の失敗をあれこれ思い浮かべて、勝手な物語を頭の中にこしらえ上げていたのである。

勿論、「膝栗毛」と「ドン・キホーテ」と私自身の軍隊生活とは、時代も場所も人間の性格もまったく違う。もっとも軍隊にはいわゆるドン・キホーテ的な英雄もいないわけではなかったが、そういう人物は真のドン・キホーテ——つまり高貴な精神の滑稽さ——とは決して縁のない連中だった。トーマス・マンは「ドン・キホーテとともに海を渡る」というエッセ

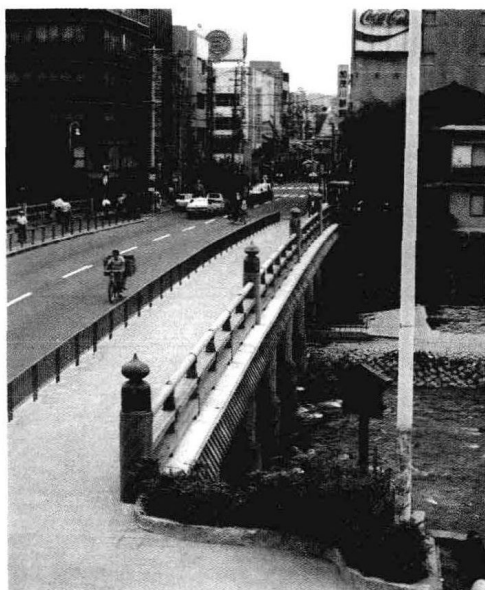
ーの中で、「ドン・キホーテ」のおかし味を次のように説明している。

《正直のところ、ここには、理想や人間や人間の高貴化などに對する信念——しばしば傷つけられてきた信念——が、哄笑の犠牲にされているかの観がある。そしてまた、低劣な現実とのこういういたましい協和こそ、本来フモールというものの姿ではないかと考えられるのである。》

ずいぶんリクツっぽい言い方だが、『低劣な現実』との『いたましい協和』というのは文学だけではなく芸術一般の『笑い』の成り立ちを、よく言いあらわしていると思う。「道中膝栗毛」の主人公、弥治郎兵衛、北八は、騎士道の再建を夢みてはるばる武者修業に旅立つラマンチャの騎士ドン・キホーテと違って、神田八丁堀の長屋の住人に



箱根に残る旧街道の石畳。弥次・喜多も、この道を登り関所を通過して三島に抜けた。



ふさわしく、要するに借金取りと女遊びの後始末の尻を持ちこまれて江戸を逃げ出すという、甚だころざし低く感心出来ぬ人物に過ぎない。

《或人間、弥治郎兵衛喜多八は原何者ぞや。答曰、何でもなし、弥治唯の親仁なり、喜多八これも駿州江尻の産、尻喰観音の地尻にて生れたる因縁によりてか、旅役者花水多羅四郎が弟子として、申童となる。されど尻癖わるく、其所に尻すはらず、尻の仕廻は尻に帆をかけて、弥治に随ひ出奔し、俱に戯氣を尽す而已。此書両士が東都神田の八丁堀に店借し居たりし中のことを著し、終に旅行の発起とする所以の、馬鹿らしきことを、作者が寝酒の飲料に、余計の著述をなすものならし》(藤栗毛発端累解)

《生国は駿州府中、枋面屋弥治郎兵衛といふもの、親の代より相応の商人にして、百二百の小判には、何時でも困らぬほどの身代なりしが、安倍川町の色酒にはまり、其上旅役者華水多羅四郎が抱の鼻之助といへるに打込、この道に孝行ものとして、黄金の釜を掘いだせし心地して悦び、戯氣のありたけを尽し、はては身代にまで途方もなき穴を掘明て留度なく、尻の仕舞は若衆とふたり、尻に帆かけて府中の町を欠落するとして

借金富士の山ほどあるゆへにそこで夜逃を駿河ものかな》(道中藤栗毛発端)

鼻之助は喜多(北)八の幼名であって、つまり弥治郎兵衛、北八は、このように江戸に出てくる前から、ただならぬ仲であり、江戸を食いつめる前に駿州府中を同じようにしくじってきたというわけだ。(もっとも、この「発端」は「東海道中膝栗毛」の好評にこたえて、あとからつけ加えられたもので、最初からの設定ではないから、かなりコジツケてつくられてはいるのだけれども——)どっちにして

江戸五街道の起点・日本橋。現在は橋の上に高速道路が走り、ここから見えたという富士山もビルとスモッグで垣間見ることさえ出来ない。

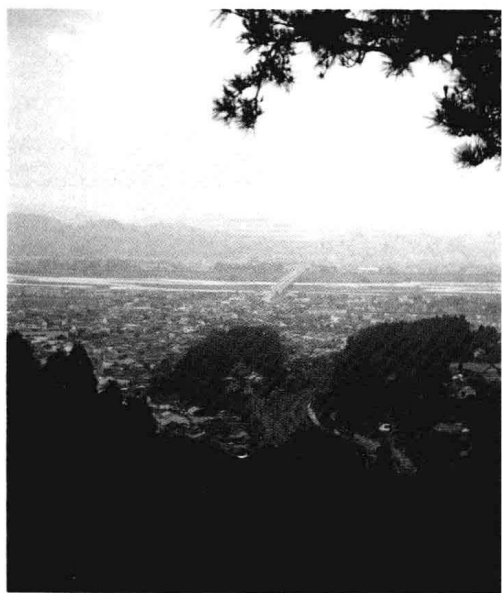
東海道五十三次の終点京都三条大橋。昔ながらの鴨川は流れているが、橋はコンクリートであり、京の街もビルが建ち並んでいる。

も、こういう弥治喜多二人組と、ドン・キホーテ・サンチャ・パンサの二人組とは、同じ滑稽珍道中であっても、そのおかしさの質はまったく違う。つまりトーマス・マンのいう『低劣な現実とのいたましい協和』というのは、まさに「ドン・キホーテ」にぴったり当てはまるのであって、弥治喜多の方は彼等二人が最初から『低劣な現実』そのものであるようにも思われる。にも拘わらず、もし、弥治喜多とドン・キホーテとどちらが好きか、と訊かれたら、私は一も二もなく弥治喜多の方をとるだろう。

たしかに、『憂い顔の騎士』ドン・キホーテと忠実なる従者サンチャ・パンサの二人組は、この世のものならぬ美しい主従であって、その精神の余りの高潔さのために、しばしば世間の嘲笑を招く結果におわっているのは、じつに高尚なフモールをかし出しているというべきであろう。



しかし率直にいうと私には、この古典的『フモール』小説は、あまり面白くはない。れいの、金ドライの兜をかぶり、瘦せ馬にまたがって、丘の上の風車小舎に突進する場面なんか、すでにあまりに何度も聞かされていたせいか、実際に読んでみると、おかしくて笑いがこみ上げるといふわけには、どうしても行かないのである。いや、おかしくないからつまらないというわけではないだろう、もっと滑稽になってもいいはずなのに、という隔靴搔痒の感に絶えずつきまとわれることは否めない。これは一つには、この小説を翻訳でしか読めないということもあるだろう。実際、言葉のおかし味というのは他の言葉に置きかえることが出来ないことが多いのだから。しかし、たぶんこれは言葉だけの問題ではないだろう。笑いに對する感受性そのものが、われわれとスペイン人、ないしは西洋人全般とは、



東海道上、箱根の次に
来る難所・宇津の谷峠
の景観。江戸時代は、
山賊・雲助などが横行
したという。

大井川の渡しで有名な
静岡県大井川。弥次・
喜多の珍道中も、この
渡しで一騒動。

山東京傳肖像



十通舎一九



上から、山東京伝、十通舎一九、式亭三馬の肖像。

何処か根本的に違っているのだろう。

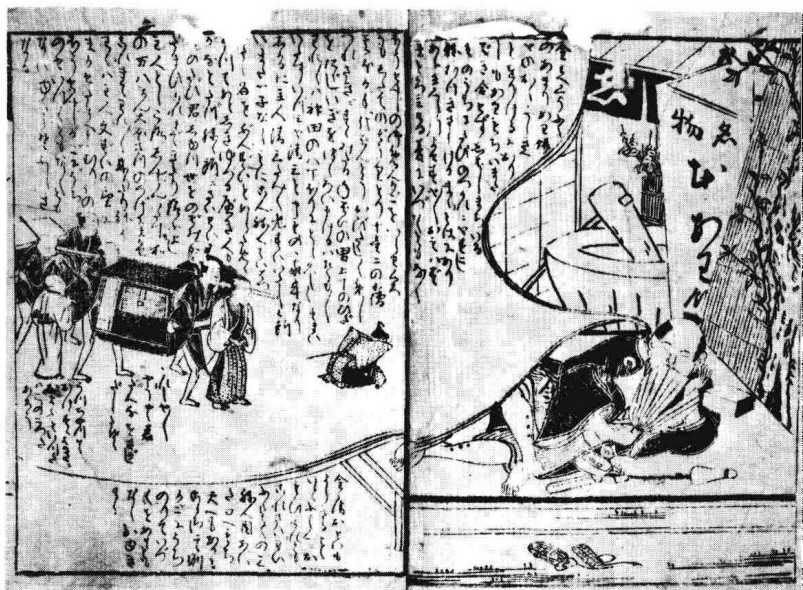
よく外国人は、日本人が笑うべきでないときに笑うといつて不思議がる。たしかに日本人は、大金を落したといつては笑い、子供が死んだといつては笑い、家が丸焼になつたといつては笑う。こういうことは、われわれ自身が考えても不思議である。敗戦直後の頃、焼け跡の街を歩いてみると、向うから自転車に乗ってやってきた男が、通りがかりの誰かに向つて、

「なァんだ、おまえの家は焼けなかったのか？ おれんちは焼けちゃった、丸焼けだ、アッハハハハ」

と、大声に笑いながら、また何処かへ走り過ぎていつてしまったことがあつた。その笑い声の、いかにも明るく愉快、そうだったのが、ちょっと異様な感じだったので、私はいまでもハッキリと憶えているのである。たしかに、こういう場景を外国人が見たら不可解におもうに違いない。——いったい、あの日本人は何で笑っているのか、氣でも狂つたのか、それとも莫大な保険金でも手に入れたのか？ しかし、ちよつとばかり異様だったとはいふものの、私には、その自転車の男の笑いは決して不可解なものではないのだ。要するに、彼は、焼け跡でバツタリ誰か知

人に出会つて、おそらくそれまで放心状態になっていた自分に氣がつくと、高笑いせずにはいられなくなったのである。無意味といえ、それはまったく無意味な笑いだ。しかし、哀慼きわまつたとき、われわれは或る空虚なおもいをふさぐために、このような笑いを発するではないか。それは怒りと紙一重のものかも知れないが、決してヒステリックなものではない。むしろ、われわれが先祖代々つちかつた知恵——どうにも抵抗し難い敵に出会つたとき奇麗サツバリあきらめる諦念——から発する明るい声なのである。

弥治郎兵衛喜多八の道中記は、まさにそういう諦念の笑いにみちている。五右衛門風呂に便所の下駄のままつかつて風呂の底を踏みぬいたり、宿につくごとに毎晩のように夜這いをこころみては、手ひどい目にあつたり、彼等二人は愚にもつかぬ失策をくりかえしながら、おたがいに相手の愚行を笑い合い、そして慰め合うのだ。低劣といえ、これは低劣な現実そのものを反映した笑いであらう。「ドン・キホーテ」のように、理想家の主人の抱く幻想が破られると、それを現実家の従者が見て嘆くといった、立体的な構造をもった笑いはここにはない。弥治郎兵衛と喜多八



は、どちらが主とも従ともつかぬ間柄であり、そのおかしみは大部分、この二人の間でかわされるシャレや地口にかかっている。だから延々二十数年にわたって書きつがれたこの大長篇も、実際は小話をつづり合わせたようなものが平板に流れて行くだけであって、「ドン・キホーテ」のよ

うに前篇から後篇にかけて主人公の内面が大いに飛躍し、最後は滑稽感がほとんど崇高なものにまで高まって行くといった、本当の意味でのロマンチックな盛り上りは到底期待出来ない……。しかし、「膝栗毛」には、明らかに「ドン・キホーテ」にはない美しさがある。いや、それはむしろ

風流志道軒伝
金々先生栄華夢
初版本。挿画も恋川春
町白筆。

諺話浮世風呂前編 卷之上

江戸 式亭三馬戯編

五日の風静るれば早仕舞の牌と云ふ。十日の雨候るれば傘の標と云ふ。月並の休日静候て、賢と愚と。貴族のかく恩澤求給をねん公。今日煤湯は五。壁の垢と云ふ。明日貴湯は六。欲の良と云ふ。初湯の公地帯も。分も朝湯入加減。嗚呼。佐捕。いん。嘆。あ。が。ふ。風。這。前。だ。ぶ。く。の。價。あ。れ。後。吉。

『風流志道軒伝』板本。

式亭三馬による『浮世風呂』の板本。



ろウマさと言った方がいいかもしれない。勿論、美しさとかウマさとかは主観の問題であり、おまけに翻訳でしか読めないスペイン文学の古典を充分に鑑賞する能力は私にはないのであるが、それにしてもトーマス・マンは「ドン・キホーテ」をドイツ語訳で読んで結構面白いといっておき、或る程度のは翻訳でもわかるはずだ。そんなことより「ドン・キホーテ」は、私たち日本人にとっては度が強過ぎ、油っこ過ぎて、その笑いは高尚だとしても大味に過ぎて、面白味としては感じにくいのではないかと。宿屋でドン・キホーテが皆に袋叩きにされるのを見て、家来のサンチョが泣きわめく場面など、滑稽というよりは拷問に似た肉体的苦痛の方が先きにきてしまう。（蛇足になるが、「ドン・キホーテ」の訳で読みやすいのは佐々木邦のものだ。おそらくこれは英語からの重訳であろうが、佐々木邦の文体は一種飄逸な味を伝えている）そこへ行くと、「膝栗毛」の笑いは、われわれには受けとりやすいのだ。軽くスーッと入ってくる。仮に内容は相当アクの強いことが書いてあっても、それは言葉の遊びとして受けとられる。たとえば駿府にいた頃の弥治郎兵衛が旅役者の少年俳優だった喜多八に打ちこみ、

《この道（男色）に孝行ものとして、黄金の釜を掘いだせし心地して悦び》

などというのは、言葉の実体を想像しながら読むと、醜悪不潔を極めたものになるだろうが、われわれはこんな個所も口調につられて面白おかしく読んで行くだけで、べつにソドミズムの悪臭を押しつけられるということはない。それは要するに、五右衛門風呂の釜を踏みぬいたため、宿屋の亭主にネジこまれて弁償金を払わせられたあと、

《水風呂の釜をぬきたる科ゆへにやど屋の亭主尻をよこし

東海道鞠子の宿のころ
ろ汁屋「丁字屋」。弥
次・喜多はここでもヘ
マをする。手前を流れ
るのは鞠子川。

た》(本書一一〇頁)

と、しゃれをいってよろこぶのと同じである。喜多八が思い掛けず二朱も弁償金をとられて大いにふさぎ、飯ものどに通らず、しゃれも無駄口も叩く氣力を失って茫然としていると、

《弥「コレ手めへ、なにもふさぐこたアねへ。大きに徳をしたハ」

北「なにがとくだ」

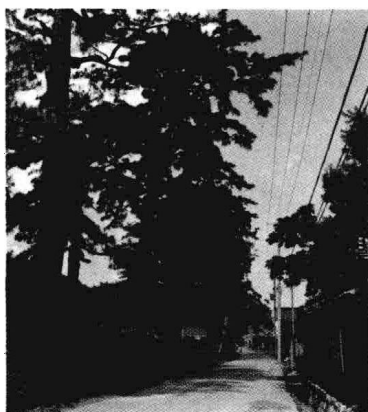
弥「かまをぬいて、式朱ではやすい。よし町へいつてみや、そんなこつちやアねへ」

北「エ、ぶしやれなんな、人の心もしらずに」

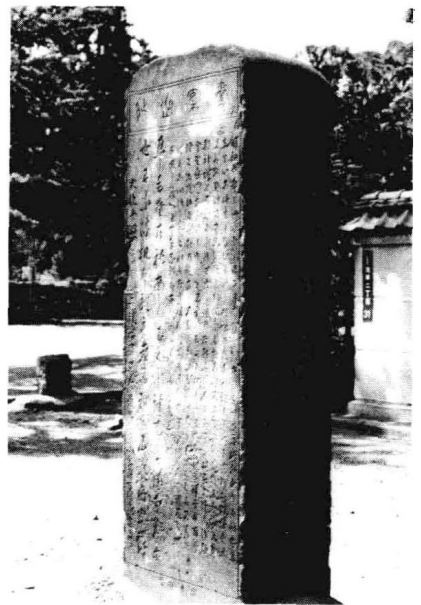
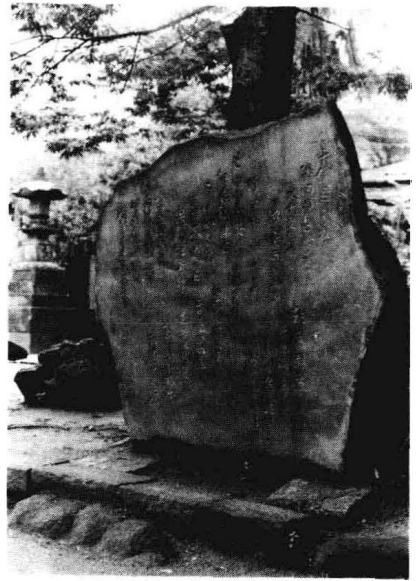
つまり、ここでは《二朱》という失費の金額だけが現実のものであって、よし町で男娼を買うの何のというのは、ふところを傷めた喜多八を慰めるための架空な冗談に過ぎない。同じことは夜這いについてもいえる。彼等が毎晩、手をかえ品をかえて夜這いをこころみるのは、肉欲のためではない。恒例となった笑いのための一種の儀式なのである。だから、不様に失敗して帰ってくることも予定のプロ

グラムに入っている。しかし、その場合でも、女に振られる淋しさというのは現実である。戸塚の駅で、とかく道中は飯盛女をしつこくすすめられてウルさいから、これからは弥治郎兵衛喜多八は親子ということにして、女を断ろう、と殊勝なことを言いながら宿に上るが、いざ晩飯になつて酒が入ると忽ちそんな約束は何処へやら、酌に出てきた女中を一生懸命くどきはじめる。しかし、女中は最初にこの二人から親子だときかされたことを飽くまでも信じているから、何を言われても取り合わない。それでとうとう、その晩も一人寝をすることになる――。

《今更ひとりねの枕さみしく打ふしけるが、夜もふけゆくまゝに、勝手もしづまり、やまの神の小言いふ声のみきこへて、此ふたり寝もやらず、着たる夜着のあかつきかけて、千手観音の利生あらたに、かゆき所へふすまもる、風の手のとゞくもうるさく、ほろ酔の酒もさめて、今おもひ廻らせば、ひとりねにおはちのまはらざるも、めしもりの杓子あたりわるきゆへにや。仮の親子の遠慮ありしは、かへつて鳥目の徳つきたりとおかしくて



上から、赤坂、御油に
今も残る東海道名物の
松並木。下は四日市を
通る旧街道。



東京向島の長命寺境内に建つ十返舎一九の辞世の歌碑。

浅草神社境内に建つ山東京伝の文机碑。

一筋に親子とおもふおんなより只二すじの銭まうけせ

斯口づきみて、打わらひつゝかたむけし、箱まくらも耳の根に、いたくもひびく夜明の鐘、はやおもてには助郷馬の嘶く声「ヒイン」／＼馬の尻のおと「ブウ」／＼長もちにんそくのうた人「竹にさあ引すゝめはアなアんあへ、ヲイ」／＼、どうする／＼（本書一〇三頁）

寝しずまった宿の寢床に、遠くから聞えてくる女将の誰かを叱る声、襖を鳴らす風の音、体じゅうがムツ搔くなつて寝そびれたところへ、ほろ酔いの酒までさめてしまう。そして、とうとう夜が白みはじめ、おもてで馬が嘶きながら尻をする音がきこえてくる……。何という淋しさ、物悲しさであろう。文章が滑稽であるだけに、旅の愁いはなお側々として胸に迫ってくるものがあるではないか。寝苦しい夜があけて一転して、馬の尻がブウブウきこえてくるあたり、このおかしさを一と言でいうならば、もののあわ

れ」というものではなからうか。

ドイツ語の《フモール》が、トーマス・マンのいうところ「低劣な現実とのいたましい協和」から生れるのだとすれば、われわれの《おかしみ》は、もののあわれを基調にしているように思われる。笑いの裏側に《いたましき》があるのは洋の東西を問わぬことだとしても、われわれの場合、あえてそれを《低劣な現実との協和》などとは呼ばず、むしろ自身を《低劣》なものと考えようとする。そこには攻撃的なシニシズムよりも、平和な諦念がはたらくのである。とくに江戸庶民の笑いは、そうだった。

このことは平賀源内の「風流志道軒伝」、「放屁論」などその他のものを讀みくらべただけでもハッキリする。源内の文章にはカドがあり、その笑いには毒がある。これは無論、源内が武士であったことと無縁ではない。日本武尊が東夷征伐のとき、草なぎの剣ならぬ草なぎの尻で野火を防ぎ、



逃げる夷の尻をしたたかに叩き切った御剣を、あらためて『吳雉の宝剣』と名付け玉うた（『放屁論後編自序』）などというのは、その剣が天皇の神権授受をあらわす三種の神器の一つであるだけに、いくら徳川時代の天皇家が衰微していたといっても、おそれを知らぬものと言わなければならぬ。こういう毒気を含んだ痛快な笑いは、さしずめスウィフトにもなぞらえられるかも知れないが、スウィフトがアイルランド人であってイギリスを絶えず敵視していたことを考えると、源内のシニズムの深さは何に由来するものか、ちよつと類がないように思われる。また「風流志道軒伝」の跋文に、

《千早振神代の昔、皇孫この豊秋津洲に降臨まし／＼ける時、猿田彦の大神、天の八衢にしてみゆきの路を遮玉ふ。爰に天鈿女命、胸乳をあらはし、帯を臍の下におし垂て、立むかひ給ひければ、さしもの大神七咫の鼻をひこつかせ、赤酸醬の眼を細めて、初て掌を抵て笑ひ、相共にみゆきを迎奉る。》

とあって、戦時中、何かといえは皇居と伊勢神宮の遙拝をさせられていた私たち学生は、これを読んでまさによつたまげのおもいであったが、「根南志具佐」には神代の芝居風景として、古事記をこんな風に書いている。

《お定の口上も相済みければ、是より天浮橋瓊杵日記、一番目より段／＼狂言に実がいり、程なく第三番目に至て、天児屋命は磯敷盧丸、本名伊弉諾尊の役、天鈿女命に傾城浮橋、本名伊弉冉尊、つもり／＼し揚代、三百両の金の代に、天瓊矛を揚屋が方へとられしを、太玉命は大戸之道尊の役にて、両人の瓊矛を詮議し給ふ検使の役、此処にて検使のつよさ、両人の愁の所、諸見物は感に堪兼、「イヨおらが鈿女よ」「イヨ児屋様」「太玉様」など、棧敷も下

吉原大門の賑わい。門の内には軒を並べた大櫓が見える。



も声／＼に、
暫鳴もしづま
らず。此時天
照太神聞し召
て、下地は好
なりたまられ
ず、御手を以
て磐戸を細目
に開きて、是
を窺す……」
こういふも
のを見ると、
主権在民民主
主義のいま
どき「風流夢
譚」のステ
ンコロコロが
すべったのこ
ろんだのと論
議を呼び、あ
げくの果ては
出版社の社長
宅が襲われ
て、社長夫人
や女中さんま
でが刺された
り殺されたり
という騒ぎに
なるのが不思

議なようだ。

しかし、こうしたサチリカルな笑いは、やはり日本人のなかでは異質なものであろう。源内など武家出身の作者の戯文は談義本といわれて、洒落本や滑稽本など町人作者のものとは区別されているようであるが、談義本のなかでも源内のものは、また格別であらう。良く知られているように源内は、戯文を書いたばかりでなく、蘭学・国学をおさめ、本草学をやったり、エレキテルの研究をしたり、物産学者でもあったわけだ。その自己執着と気性の激しさは、異常なもので、家にはつねに食客十数人を置いていたというが、最後にはそうした取り巻きのうちの二人を自邸内で殺傷し、入牢したのち牢内で獄死した。殺傷の理由はよくわからないが、おそらく発作的なものであったらしい。そういう発作的な殺意のようなものは文章の上にも感じられ、談論風発しているかわりに持続性に欠けるところがあつて、つづけて読んでいると読者の方でも退屈させられる。

われわれ日本人の間で、ながもちする笑いといえは、やはり十返舎一九の「膝栗毛」や式亭三馬の「浮世床」「浮世風呂」の方であらう。何といっても大勢順応と諦念とは、良かれ悪しかれ日本人一般の性向であつて、グサリと相手の心臓に突き刺さるような笑いは、書く方も読む方も、残念ながらそう長くは持ちこたえられないのである。皮肉やアテコスリも、せいぜい人の意表に出て、頭や尻をサツと撫でてとおる程度がいいのであつて、相手を傷つけるにしても傷痕が醜くバツクリあいてしまうようなものは、結局好まれない。

これは必ずしも、われわれに残酷さが無いということでは

右より、東京成覚寺の
恋川春町の墓。両国回
向院の山東京伝の墓。
香川県志度寺の平賀源
内の墓。



はない。ただ、洗練された知的な残酷さがないというまでだ。一九と三馬とを較べると、一九のほうは多少の残酷さとグロテスクなものがある。しかし、それは皆肉体的なものであって知的なものではない。たとえば、女房が死んだところへ義父が訪ねてくるというので、あわてて死骸を棺桶につっこみフタをする。と、やってきた義父が一と目、娘の死顔に会いたいと、棺桶の中を覗き

こんで、「おや、この仏には首がない」と騒ぎ出す。よく見ると死体が逆さまに突っこんであつたので、脚が上を向いていた、というようなものだ……。三馬の話には、こういう泥臭い残酷さがない。それは一つには、一九が地方を旅して歩く道中記で当てたのに、三馬はもっぱら江戸の市中の世態風俗をかいているためであらう。そのかわり、老人から幼児まで、年齢も職業も、ありとあらゆる種類の人間が登場する。とはいふものの、どの人物も皆、太平の世の中に分を守って不足をいわず、その日その日を気楽に暮らしているような人たちばかりだから、個性に大きなひらきはない。勿論、三馬はそんな群像を細かく選り分けて、千差万別、いろいろの癖まで書き分けており、そこに作者の苦心もあつたわけだろうが、全体の印象として、まるでひとりの人物が勝手にしゃべっているのを傍できいているような気もするのである。ただし、その会話のヤリトリは、じつに快適なテンポで、気がきいており、淀みがない。こういう軽やかさが、当時の洒落本というものの身上なのだろう。

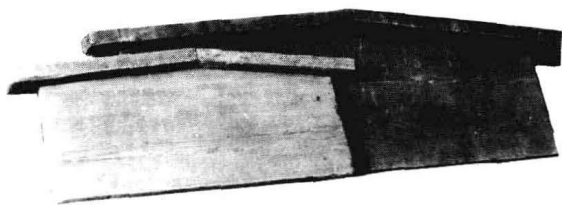
女でも、江戸前の辰巳芸者というのは、厚化粧などはせず、浅黒い皮膚をみがきぬいて、一見、素肌のままのように見えるのを誇りにしたそうだ。そういえば、三馬の弟子の為永春水は、「春色梅暦」、「春色辰巳園」、「春抄媚景英対暖語」など、辰巳芸者の活躍する人情本をたくさん書いた。春水がこうした人情本を書くようになったのは、三馬の弟子として洒落本を書くだけの才能がなかったからであるようだ。読本、中本、洒落本、滑稽本、草双紙などの区別を、私はよく知らないのだが、人情本というのはその一番あとからあらわれて、よくいえば、読本、洒落本など前に出たもののあらゆる要素をとり入れた総合芸術ともいえ

右より、東京東陽院の十返舎一九の墓。正泉寺の式亭三馬の墓。妙善寺の為永春水の墓。

るが、じつに雑駁で一段低い低級なものと思われたいらしい。春水自身は読本作者の馬琴を尊敬していたが、馬琴は春水をひどい言葉で罵っている。

《春水は始めせどりと歎云ふゑせ本屋にて、軍書講釈に前座など読んで世渡りにしたり、其後をさき戯作を旨としつゝ、古人南仙笑楚満人の名号を冒して、又楚満人と称せしを、ふさはしからずとて、貸本屋らが笑ひしかば、棄て亦為永春水と称し、教訓亭と号す。文政中、人の為に、吾旧作の読本杯を筆削し、再板させて多くの書を流したれば、実に憎むべき者なり、性酒を貪りて飽くことを知らず、且、壬寅の秋より人情本とかいふ中本一件にて、久しく手鎖を掛けられたる心労と、内損にて終に起すといふ。子なし、養女一人あり（後略）》

つまり春水は、馬琴の旧作を勝手につくりかえて出版したのを咎められたのであろう。師匠の三馬には才能を見限られ、私淑した馬琴にもこのように罵倒されては、春水としてはまことに立つ瀬がなかったに違いない。しかし、当時すでに馬琴を除いた読本も、洒落本その他も皆、行き詰ってマンネリズムに陥っていたらしく、軽蔑されながらも人情本というものが迎えられるようになっていたようだ。それに小説構成上の型式からいっても、人情本にはたしかにこれまでにはない新しい工夫がある。



「梅暦」は、唐琴屋の養子丹次郎を主人公に、唐琴屋の娘お長、辰巳芸者の米八、女髪結のお由、お由の旦那で丹次郎の恋仇藤兵衛、等々の人物がいろいろな縁で複雑につながっており、事件は二十何年間にわたっている。これを読本式に発端から書き起すと、おそろしく長い物語になるわけだが、春水みずから「為永流」



大井川の川岸に在った川会所に立っていた高札。

箱根関所跡に復元された関所の建物。芦ノ湖と外輪山に挟まれた狭い街道脇に在った関所は、どうしても江戸と上方との交通のためには通らなければならなかった。